

第 69 回日本生殖医学会学術講演会

0-042

愛知 2024. 11. 14-15

二相性未熟卵体外成熟 (CAPA-IVM) と従来法との臨床成績比較

尾形龍哉¹、佐藤学^{1,2}、宮本有希¹、森本義晴¹

¹HORAC グランフロント大阪クリニック

²IVF なんばクリニック

【目的】 未熟卵体外成熟-体外受精法 (IVM-IVF) は、一般的な IVF と比較して来院やゴナドトロピン注射をほとんど必要とせず、卵巣過剰刺激症候群 (OHSS) を回避することができる。しかしながら、IVM-IVF による妊娠率は通常の IVF に比べ低率であり、依然改善の余地がある。そこで成熟培養の段階を分けた二相性未熟卵体外成熟 (CAPA-IVM) を導入し、その臨床成績を従来の IVM-IVF と比較検討を行った。

【方法】 当院で CAPA-IVM を実施した 32 周期と IVM-IVF を実施した 57 周期を対象とした。各方法での採卵数、成熟率、正常受精率、臨床妊娠率を比較した (検討 1)。CAPA-IVM 採卵後、卵丘細胞-卵母細胞複合体 (COCs) の状態により卵丘細胞に十分に覆われている A 群と顆粒膜細胞に殆ど覆われていない B 群にわけ、その後の成熟率を比較した (検討 2)。

【成績】

検討 1 : CAPA-IVM と IVM-IVF で採卵数に差はなかった。成熟率は CAPA-IVM で有意に高く (55.4% vs. 47.2% ; $p < 0.05$)、正常受精率は高い傾向にあった (73.4% vs. 65.6% ; $p = 0.06$)。胚移植あたりの臨床妊娠率は CAPA-IVM で高い傾向にあった (45.0% vs. 24.2% ; $p = 0.08$)。検討 2 : A 群の成熟率は B 群よりも有意に高かった (60.1% vs. 8.6% ; $p < 0.05$)。

【結論】 成熟培養を二相に分けることで成熟率が上昇し、得られた成熟卵の正常受精率を改善できる可能性が示唆された。成熟率の向上には COCs の状態保全にかかっていると考えられ、採卵では IVF 時よりも吸引圧を下げる事が望まれる。